

# 体育における「主体的な学び」の検討 —「3層での重点フレーム」と学びの姿—

鈴木 一成

保健体育講座

## Consideration of “Agentic Learning” in Physical Education —Focus Frame in Three Stage and Learning—

Kazunari SUZUKI

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### I. 問題と目的

学習指導要領の改訂は学校現場に様々なオーダーを迫ることになる。その一つには、改訂の際に示されるキーワードを授業として具現化することがある。学校現場で求められる授業づくりに活用できる資料を提示したい。これが本稿の問題意識である。

2017年3月公示の学習指導要領（以下、新学習指導要領）ならびに同年7月には小学校学習指導要領解説体育編および中学校学習指導要領解説保健体育編がそれぞれ文部科学省のWebにて公開されている<sup>1) 2)</sup>。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）」が示されている<sup>3) 4)</sup>。とりわけ「主体的な学び」は、学校教育法第30条の「主体的な学習に取り組む態度」をはじめとして、体育授業研究の研究・研修の主題にも設定されており<sup>注)</sup>、新学習指導要領の主要なキーワードであるといえる。

本稿で言う「主体的な学び」とは中央教育審議会答申の「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関係づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動をふり返って次に繋げる学び」とする<sup>5)</sup>。

しかし、この定義のままでは、体育における「主体的な学び」の解釈が曖昧であり、今後の授業づくりに活用できる資料がないと考える。そこで本研究では、体育における「主体的な学び」を明確にし、具現化するための資料を作成することを目的とする。

### II. 方法

体育における「主体的な学び」を検討し明らかにするために、溝上の「主体的な学習スペクトラム（以下、

主体的な学習)<sup>6)</sup>を援用して、関連を整理する。その理由は、本稿の「主体的な学び」の定義が一致しており、「3層での重点フレーム」を援用し体育に対応させることにより、体育の「主体的な学び」の深まりを検討することができると思ったからである。

図1は、「主体的な学習」に「主体的な学び」を位置付けたものである<sup>6)</sup>。

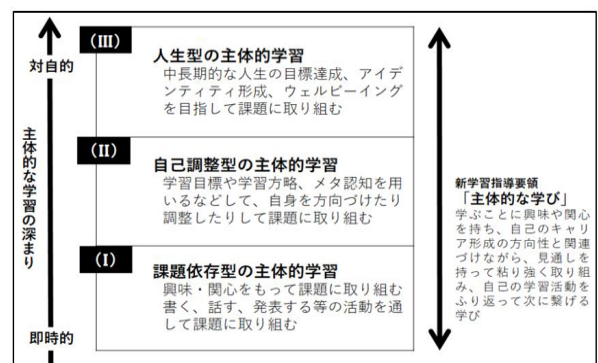


図1. 主体的な学習に「主体的な学び」を位置付ける<sup>6)</sup>

「主体的な学習」は、第I層「課題依存型 (task-dependent)」, 第II層「自己調整型 (self-regulated)」, 第III層における「人生型 (life-based)」の三層からなるものである。縦軸は「主体的な学習」の深まりを示している。この軸は「即時的・対目的」であり、梶田の考えによるものである<sup>7)</sup>。「即時的」とは自分自身の存在に対する気づきや反省を欠いた、ただ自身があるという存在のしかたを指すものである。一方、「対目的」とは自分自身の存在に気づき、自分自身を対話し、ときには自分自身に背くような反省的な存在のしかたを指すものである。

これを大枠として、次に体育における「主体的な学び」の枠組みをみていく。体育の「主体的な学び」は「運

動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、それを考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりする学びの過程と捉えられる」と整理されている<sup>8)</sup>。

図2は、先の図1（「主体的な学習」と新学習指導要領の「主体的な学び」の定義）を参考にして、体育における「主体的な学び」の枠組みを対応させたものである。

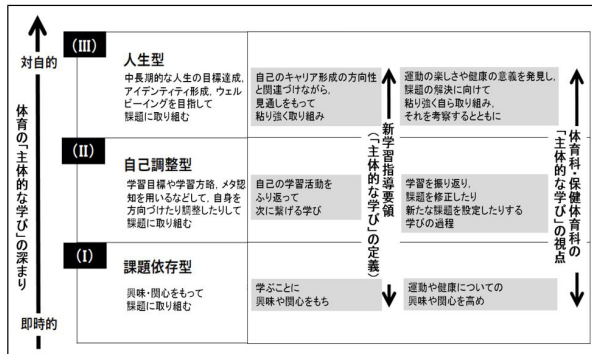


図2. 体育の「主体的な学び」の枠組み

図2の中央にある新学習指導要領（「主体的な学び」の定義）および右にある体育科・保健体育科の「主体的な学び」の視点は、縦の双方向の矢印になっている。これは、「第Ⅰ層 課題依存型」、「第Ⅱ層 自己調整型」、「第Ⅲ層 人生型」の各層の関連性があることを示している。

本稿では、学校現場に活用可能な資料を提示するために、溝口の「3層での重点フレーム」を援用して体育に対応させる。そして、図2の枠組みを用いた各層における体育の「主体的な学び」について、①各層の特徴、②各層での重点フレーム（体育授業をどのような視点でみるか）、③各層での重点フレームからみえる体育授業の学びの姿の三点を検討することで、体育の「主体的な学び」を明らかにする。

### Ⅲ. 各層の検討

#### 1. 第Ⅰ層（体育における「課題依存型」）

##### (1) 第Ⅰ層の特徴

第Ⅰ層の体育における「課題依存型」では、溝口の「課題依存型」を援用でき、「興味・関心をもって課題に取り組む」が、体育の「運動や課題についての興味や関心を高め」に対応すると考える。その理由は、体育の学ぶ対象は運動や健康であり、興味・関心という枠組みに整理できると考えるからである。

第Ⅰ層の体育授業では、「この課題に取り組むのは面白い」というような子どもが課題の面白さに夢中になっていく姿が期待できると考える。その理由は、子

どもがつくった課題というよりも、まずは教師が提示した課題の面白さに子どもが促されるという姿である。つまり、第Ⅰ層は、課題に促されて「主体的な学び」が発現していることと、「主体的な学び」といながらも始点は与えられるという受動性が内在していることの二点が特徴といえる。

#### (2) 第Ⅰ層の重点フレーム

第Ⅰ層では受動性が内在している。そのため、「主体的な学び」となるには、いかに受動性から能動性へとシフトチェンジできるかが求められる。その実現には二つのフレーム転換が考えられる。

一つ目は、子どもフレームの転換である。「子どもは受動的な存在のままである」という前提であれば、「させられる」という受身の姿のままとなる。しかし、「子どもは能動的な存在になる」という前提に立つと、進んで・積極的に・自主的に「する」や夢中に「なる」という姿が期待される。さらに、「する」と「なる」を組み合わせると「したくなる」という姿にもなる。「する・なる・したくなる」といった姿は、子どもの能動性を解釈する手がかりとなる。

二つ目は、課題フレームの転換である。授業は教師の意図的な教育活動であるため、計画性は外せない。ところが、教師が計画した「課題」に「子ども」を合わせることを固持した場合、子どもの実際と合わなくなることも考えられる。それでも「課題」に「子ども」を合わせることは、教師は子どもに課題を強いることになり、受動性へと傾斜する。一方、「子ども」に「課題」を合わせようすると、教師は子どもの実態に合わせた課題づくりを目指すことになる。常に子どもの学びの変容にも対応できることは子どもに合った課題づくりとなり、能動性が期待できる。

以上、第Ⅰ層（体育における「課題依存型」）を検討した結果、表1のように「受動性・能動性」と「子どもフレーム・課題フレーム」との対比で整理して表した。なお、ここで教師から与えられた「課題」、つまり、決まっている課題について子どもが進んで・積極的に取り組む場合は「自主的」となる。一方、「課題」についても他から決められていない条件下で、進んで・積極的に取り組む場合は「主体的」となり、「自主的」と「主体的」の相違点もふまえておきたい。

表1. 第Ⅰ層の「受動性・能動性」と「子どもフレーム・課題フレーム」との対比

|         | 受動性              | 能動性           |
|---------|------------------|---------------|
| 子どもフレーム | 子どもは受動的な存在のままである | 子どもは能動的な存在になる |
| 課題フレーム  | 課題に子どもを合わせること    | 子どもに課題を合わせること |

(3) 第Ⅰ層の重点フレームからみえる学びの姿

「運動したくなる学び」

体育の「主体的な学び」の視点では、運動や健康についての興味や関心を「もつ」だけではなく、「高める」ことにまで言及している。第Ⅰ層で、運動や健康についての興味や関心を「高める」には、どのような授業づくりの視点が求められるのだろうか。

現在の体育の体育授業づくりのベースになっているものには運動の特性がある。これは、運動を行う人の立場から運動の意味と価値を捉え、それを中核に学習指導を考えているとされる<sup>9)</sup>。一般的にこれまで、効果的特性、構造的特性、機能的特性の3つの特性によって捉えられてきた<sup>10)</sup>。効果的特性はその運動が心身の発達に与える効果に着目した特性であり、構造的特性はその運動が成り立っている形式や技術の仕組みに着目した特性であり、そして、機能的特性は、その運動がそれを行う人にとってどのような欲求や必要を充足する機能をもっているかに着目した特性であるとされる<sup>11)</sup>。さらに、授業づくりの際に、その運動の面白さを「機能的特性」としての「働きかけておもしろい」という運動の面白さと、「発生的特性」としての「働きかけられておもしろい」という運動の面白さの二つの側面から捉える視点は、学び手の学びの変化を解釈するという観点からも重要な示唆であると考えられている<sup>12)</sup>。

第Ⅰ層での重点フレームでは、「子どもは能動的な存在になる」という考えを支持して「子どもに課題を合わせること」によって、「する・なる・したくなる」といった子どもの能動性を期待する。運動や健康についての興味や関心を高める（高まる）ことは、「運動したくなる」という姿に置き換えることができると考える。

第Ⅰ層の重点フレームからみえる学びの姿を読み解くための資料として、3年間の小学校体育の授業実践を「運動したくなる環境づくり」というテーマで帰納的な整理を試みた実践報告がある<sup>13)</sup>。

図3は「運動したくなる学習環境づくり」の7つの

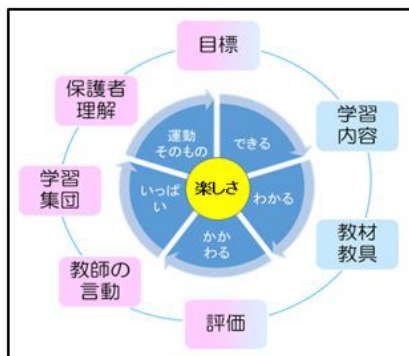


図3. 運動したくなる環境づくり<sup>13)</sup>

視点を整理したものである。「①目標・②学習内容・③教材教具・④評価・⑤教師の言動・⑥学習集団・⑦保護者理解」の7つは、運動したくなる学習環境づくりの視点であり、すべて関連していることを示している。また、この7つの視点は授業計画・実践・改善の観点ともなり、子どもの楽しさを探索する糸口にもなると考える。

この7つの視点は運動したくなる学びに着目しており、子どもの運動や健康についての興味や関心を高める（高まる）ための視点にもなると考える。

2. 第Ⅱ層（体育における「自己調整型」）

(1) 第Ⅱ層の特徴

第Ⅱ層の体育における「自己調整型」では、溝口の「自己調整型」を援用でき、「学習目標や学習方略、メタ認知を用いるなどして、自身を方向づけたり調整したりして課題に取り組む」が、体育の「学習を振り返り、課題を修正したり、新たな課題を設定したりする学びの過程」に対応すると考える。その理由は、体育における「振り返り」は「学習目標や学習方略、メタ認知」を用いることになると考えるからである。また、「課題の修正・新課題の設定」は学び手を方向づけたり調整したりすることになると考えるからである。

第Ⅱ層「自己調整型」の体育の授業では、自己を方向づけたり調整したりして課題に取り組む姿が期待できる。その際、①学習目標、②学習方略、③メタ認知などを用いることが考えられる。具体的には、①学習目標を用いれば「次のリーグ戦は絶対勝とう」、「難しい技もあきらめずに取り組もう」といった目標に関する方向性がみえてくる。②学習方略を用いれば「ビート板を使って、平泳ぎのかえる足の動きを練習する」といった活動を定めることができる。③メタ認知を用いれば、「課題によって練習の仕方を変えよう」「これまで『このやり方』だったけれど、うまくいかないの『あのやり方』に変えてみる」といった自己の取り組みを調整することができる。

これら三つを用いることで学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりする学びの過程の実現が期待できる。このように子ども自身が自己を方向づけたり調整したりすることによって「主体的な学び」が発現している点が特徴といえる。

(2) 第Ⅱ層の重点フレーム

第Ⅱ層では、自己を方向づけたり調整したりしているのが教師か、それとも子ども自身かによって、その取り組みが受動性か、能動性かに分けられる。

第Ⅱ層の取り組みが受動性の場合、情報は教師だけが「提供」するものという考えとなる。そのため、教育課程は教師が「教えること」になり、指導計画はまず教師がお手本を見せ、次に子どもが練習して、最後に子どもがどれだけお手本に近づけたかという出来

栄えの評価となる。そして、振り返る内容は、教師が与えた情報、教師が教えたこと、教師の提示したお手本にどれだけ近づいたかというものとなる。教師によってもたされた学習目標によって自己を方向づけたり調整したりして課題に取り組む姿は期待できる。しかし、自分で設定した学習目標、自己決定した学習方略、自分の学びの履歴などを用いて自己を方向づけたり調整したりして課題に取り組むことは期待することはできないと考える。それは、自己を方向づけたり調整したりするのは常に教師になるからである。

第Ⅱ層の取り組みが能動性の場合、情報は実践の中で「生産」していくものという考えとなる。そのため、教育課程は子どもに「学ばれること」になる。指導過程は、「まずは試行しながら思考する、試行してから思考する、思考してから試行する。そして、再試行・再思考する」ということになる。子ども自身もつ学習目標によって自己を方向づけたり調整したりして課題に取り組む姿が期待できる。それは、自己を方向づけたり調整したりするのは常に自分になるからである。

以上、第Ⅱ層（体育における「自己調整型」）を検討した結果、表2のように「受動性・能動性」と「情報フレーム・教育課程フレーム・指導計画フレーム」との対比で整理して表した。

表2. 第Ⅱ層の「受動性・能動性」と「情報フレーム・教育課程フレーム・指導計画フレーム」との対比

|          | 受動性                 | 能動性                   |
|----------|---------------------|-----------------------|
| 情報フレーム   | 情報は教師だけが与えるもの（情報提供） | 情報は実践の中での生産するもの（情報生産） |
| 教育課程フレーム | 教師が教えること            | 子どもに学ばれること            |
| 指導計画フレーム | 手本－練習－出来栄<br>え評価    | 試行・思考－再「試行・思考」        |

### (3) 第Ⅱ層の重点フレームからみえる学びの姿

#### 「問いが生まれる学び」

体育授業内における情報は実践の中で生産される場合、課題解決に先だって課題形成となる情報の引き出し方が求められることになる。実際の授業では、課題解決が先立って、まずは問題が生じる。問題とは「今の姿（現在地）と願う姿（目的地）との差異」であるとする、この差異を認識すると、問題発生となる。当人にとって極めて大きな差異であれば非常事態となる。授業の中では、問題の大きさに立ちすくむこともあるかもしれないし、あるいは問題そのものに気付かないことや気付けないこと、問題のとらえ違いがあることも考えられる。だからこそ、何が問題なのかと突き止めていき、問題を問題として把握するための情報

の引き出し方がポイントになると考える。野口は、「問題そのもの」を外在化するというホワイトとエプソンの独創的なアイデア<sup>14)</sup>を紹介している<sup>15)</sup>。これは問題そのものが不明である場合、問題そのものを外在化する技法である。しかし、問題を他者のせいにした場合、その後の課題解決は他人事となり、もたされた課題となる。太田は、自分のものであるという「所有感」こそが「やらされ感」の対極にあるものとしている<sup>16)</sup>。体育授業の実際には、問題は他の誰かのものではなく、問題の「所有感」をもつと居ても立っても居られないような状況になることがある。心底何とかしたいという本気が学びの原動力になる場合である。そして、「問題を解決するためにどうしたらいいのか」と課題そのものについて子どもが試行・思考の往還しながら探索する課題形成は、課題解決に先だって必要であると考えられる。その際、体育授業とは、常に答えを出すためだけでなく、むしろ、問いが生まれる学びへの情報の引き出し方が鍵になると考える。問題そのものの外在化と問題の所有感にいたる課題形成は、問いが生まれる学びの保障になると考える。

### 3. 第Ⅲ層（体育における「人生型」）

#### (1) 第Ⅲ層の特徴

第Ⅲ層の体育における「人生型」では、溝口の「人生型」を採用でき、「中長期的な人生の目標達成アイデンティティ形成、ウェルビーイングを目指して課題に取り組む」が、体育における「運動の楽しさや健康の意義を発見し、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、それらを考察する」に対応すると考える。その理由は、体育における「運動の楽しさや健康の意義」は「中長期的な人生の目標達成アイデンティティ形成、ウェルビーイング」には欠かせないものであり、目標となる対象となると考えるからである。また、目指す対象に向けての「課題の取り組み」が、「粘り強く自ら取り組み、考察する」という具体的な体育での学びの姿になると引き取ることができると考えるからである。

第Ⅲ層「人生型」の体育の授業では、「自分にとっての運動の意義を考えたい」、「苦手なことから逃げない自分をつくりたい」、「みんなで体育をする幸せを感じたい」、「粘り強く考えたい」などを目指して、粘り強く取り組む姿を期待する。課題に取り組むことに関わって、自己を対象化する点では第Ⅱ層「自己調整型」と同じである。しかし、第Ⅲ層「人生型」は、振り返りの時間的な広がりや内容的な深まりがある。具体的には、なぜ体育を学ぶのかといった、体育の学びの中において自分にとっての体育を学ぶ意味が、自己の過去や未来の事象に関係づけられて創り出されていくということになる。つまり、過去から現在、そして未来へと、個人がどう生きていくのかという自己物語が学

びに反映させることが第Ⅲ層の特徴といえる。

## (2) 第Ⅲ層での重点フレーム

第Ⅲ層では、過去から現在、そして未来へと、個人がどう生きていくのかという自己物語を学びにどう反映させるかが求められる。そのため、授業のストーリーの捉え方が鍵となると考える。鹿毛は授業のストーリーには「脚本としてのストーリー」と「ハプニングとしてのストーリー」の二種類あるとしている<sup>17)</sup>。

「脚本としてのストーリー」は教師が授業に臨む前に構想するため、脚本どおりに授業を進行させようとするものである。一方、「ハプニングとしてのストーリー」は事前に筋書きを描くことが不可能で、何が起きるのかをあらかじめ予想することは困難で、事後の結果としてのみ、その全体像が見えてくるといった性質をもっているというものである。鹿毛は授業のストーリーをこれらのうちのどちらか一つに当てはめて理解することができないとして、この二つのストーリーの相互作用として、世界で一回きりのユニークな授業が編み出されていくとしている<sup>18)</sup>。

体育の授業における「脚本としてのストーリー」は、健康や安全面における指導を始めとして、事前合理性に主眼を置き、主に教師の指示（インストラクション instruction）を授業の中核とする場合がある。この場合、いかに指示するかによって、効率性と獲得の学習が展開されていく。

一方、「ハプニングとしてのストーリー」は、事後の結果として整理する事後合理性に主眼を置く。事後合理性には、一つひとつの出来事、子どもの言動の中にはそれぞれが全くの無関係と思われることでも、視点や視座を変えることで、何かの「関係」を見付けることができ、そこに「意味」を感じ取ることができる機会がある。田坂は、まったく関係のない位置にある夜空の星々が「オリオン座」や「さそり座」など、意味を持った「星座」を形成していることを、「コンステレーション」と呼ぶとしている<sup>19)</sup>。授業での一つひとつの出来事に「関係」を見付けて、「意味」を感じ取ることが「自分の学び」になると考える。

以上、第Ⅲ層（体育における「人生型」）を検討した結果、表3のように「脚本としてのストーリー」と「ハプニングとしてのストーリー」の特徴を整理した。

表3. 第Ⅲ層の「脚本としてのストーリー」と「ハプニングとしてのストーリー」の特徴の対比

|    | 脚本としてのストーリー                        | ハプニングとしてのストーリー                       |
|----|------------------------------------|--------------------------------------|
| 特徴 | 事前合理性<br>インストラクションによる<br>効率性と獲得の学習 | 事後合理性<br>コンステレーションによる<br>関連性と意味づけの学び |

## (3) 第Ⅲ層の重点フレームからみえる学びの姿

### 「問い続ける学び」

教師を目指す学生の中には、小・中学校の思い出が契機となっている場合もある。幼少期の一瞬と思われる出来事は、その後の自分の人生の中で永遠に輝き続けていると考えることができる。こうした現象は、自己物語が、第Ⅰ層の「課題依存型」と第Ⅱ層の「自己調整型」の学びの経験が第Ⅲ層の「人生型」の中でつながることによって生まれてくるという考え方を支持するといえる。一方で、ある出来事を契機として自分の思い込みに気づき、新たな解釈を余儀なくされることもある。野口は、ある状況を支配している物語を「ドミナント・ストーリー」、それを疑いその代わりとなるものが「オルタナティブ・ストーリー」としている。そして、一つの「ドミナント・ストーリー」が効力を失うと、「オルタナティブ・ストーリー」が次の「ドミナント・ストーリー」となってその状況を支配し続けるとしている<sup>20)</sup>。第Ⅲ層の「人生型」における体育の「主体的な学び」は、問い続けることが新たな自己物語を創造することになると考える。

## IV. まとめ

本稿では、体育における「主体的な学び」を明確にし、具現化するための資料を作成するために、溝口の「3層での重点フレーム」を援用して、体育の「主体的な学び」について「第Ⅰ層（課題依存型）」、「第Ⅱ層（自己調整型）」、「第Ⅲ層（人生型）」において、各層の特徴、各層での重点フレーム（体育授業をどのような視点でみるか）、各層での重点フレームからみえる学びの姿の三点を検討することができた。

しかし、第Ⅰ層の「運動したくなる学び」、第Ⅱ層の「問いが生まれる学び」、第Ⅲ層の「問い続ける学び」が、明確な体育の「主体的な学び」の姿とは言い難い。体育授業がもつ個別具体的な現象から検討を重ね、体育の「主体的な学び」の独自性を検討していくことが今後の課題である。

## 注

愛知県内では「平成28年度西尾市教育研究会研究主題『課題に気づき、解決に向けて主体的に活動する体育学習』<sup>21)</sup>」、「平成29年度安城市教育研究会一斉研修会研修主題『課題に気づき、解決に向けて主体的に活動する体育学習』<sup>22)</sup>」などがある。また、名古屋市内では「平成28年度名古屋市体育研究会の個人研究主題『主体的に運動に取り組むベースボール型ゲームの実践』、『主体的に学習する体育学習』『進んで運動に取り組む体育学習』、『主体的に考え、ボール運動に取り組むことができる子どもの育成』<sup>23)</sup>」がある。

## 引用参考文献

- 1) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 解説 体育編  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017\\_10\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_10_1.pdf) (2017年9月19日確認)
- 2) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 解説 保健体育編  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018\\_8\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018_8_1.pdf) (2017年9月19日確認)
- 3) 前掲書1) p. 4
- 4) 前掲書2) p. 3
- 5) 中央教育審議会 (2016) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) pp. 49-50  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/icsFiles/afieldfile/2017/01/10/13809020.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/icsFiles/afieldfile/2017/01/10/13809020.pdf) (2017年4月28日確認)
- 6) 溝上慎一 (2017) 主体的な学習とは. [http://smizok.net/education/subpages/a00019\(agentic\).html](http://smizok.net/education/subpages/a00019(agentic).html) (2017年4月28日確認)
- 7) 梶田叡一 (1996) 〈自己〉を育てる—真の主体性の確立—. 金子書房
- 8) 前掲書5) p. 191
- 9) 鈴木直樹 (2008) 関係論に立つ小学校体育の授業づくり. 大学教育出版 p. 28
- 10) 前掲書5) p. 29
- 11) 鈴木直樹・梅澤秋久・鈴木聡・松本大輔 (2013) 学び手の視点から創る小学校の体育授業. pp. 32-33
- 12) 前掲書11) p. 38
- 13) 名古屋市立柳小学校 (2016) 学校努力点最終報告書
- 14) White, M. & Epston, D. (1990) Narrative Means to Therapeutic Ends. Norton [小森康永訳 (1992) 物語としての家族. 金剛出版]
- 15) 野口裕二 (2002) 物語としてのケア. 医学書院. pp. 70-79
- 16) 太田肇 (2010) 「見せかけの勤勉」の正体. PHP 研究所. p. 154
- 17) 鹿毛雅治 (2007) 子どもの姿に学ぶ教師. 教育出版. pp. 212-213
- 18) 前掲書17) p. 214
- 19) 田坂広志 (2006) プロフェッショナル進化論. PHP ビジネス新書. p. 71
- 20) 野口裕二 (2002) ナラティブ・アプローチ. 勁草書房. pp. 12-14
- 21) 西尾市教育研究会 (2016) 平成28年度一斉研究会配付資料
- 22) 安城市教育研究会 (2017) 配平成29年一斉研修会度付資料
- 23) 名古屋市体育研究会 (2016) 第48回研究発表要項

(2017年9月20日受理)